

脳に百害あって一利なし



学者にも、「死ぬほどタバコが好き」というひとがいるかも。今度は、「タバコを吸うひとは、パーキンソン病になりにくい」という論文の話だ。

パーキンソン病の患者さんを調べてみたら、タバコを吸っていたひとが少なかった。吸っていても吸う本数が少ない。吸っていた期間が短いなどという。で、ひょっとしたら、タバコに神経保護作用があるのかも、とまで言う。

だが、パーキンソン病の患者さんがタバコを吸い続けていると、認知症になりやすくなるという論文もある。タバコを吸うひとは、吸わないひとの4、5倍も危険度

タバコはこわい

が高いというのだ。どうしてくれる。認知症のほうがこわい。

かってヘビースモーカーであったワッシーは思い出す。起きるの一本。頭がクラツとしたもの。ニコチンが脳血管を収縮させ、血流を低下させたためか。そんな、脳が真っ白になるような恐ろしいことが、毎日、何度も繰り返される。慢性的な脳の血流低下が脳の動きに良いワケがない。

タバコでもう一つこわいのは、血液が濃くなることだ。タバコの煙に含まれる一酸化炭素は、ヘモグロビンと結合しやすい。酸欠状態になって、二次性の多血症をきたす。血液が、ドロドロ、ネバネ

血液ドロドロ、酸欠にも

バになる。細くなった脳の血管を、血液は流れるだけでやっただ。簡単に詰まる。アチコチ詰まれば、認知機能も低下する。

タバコだけは、百害あって一利なしだ。というのに、禁煙できない悪友は「父親は、97歳で死ぬまでタバコを吸っていた。が、ガンにも認知症にもならなかった」と頑固。さらには、「学者の養老孟司だって、絶対に禁煙しないゾ」と言う。が、ワッシーは、統計的に喫煙は体に悪いという話をしているのだ。例外もあれば、屁理屈を言っひともある。

(石黒修三 しいぐるクリニック
・脳神経外科専門医、金沢市在住)